
非実在青少年学級

伊藤 剣璽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

非実在青少年学級

【Nコード】

N8797X

【作者名】

伊藤 剣璽

【あらすじ】

非実在青少年たちが集う学級。そこで起きるのは滅茶苦茶ばかり。

朝、登校し、靴箱に靴を収めていると、真横にダークマター野田がワープしてきた。

「うわっ」

俺は突然のことに驚いてしまって、ひゃああ、と高校生とは思えないくらい情けない声を出してしまう。

ダークマター野田も俺の悲鳴じみた声を聞いて、少なからず驚いているようだった。人型の風船に墨を流し込んだようなダークマター野田なので表情がうかがえるというわけではないけれど、二年間も共に学生生活を送っていると、なかなかどうして心情の機微が読めてくるものだ。

「あ、おはよう」意外にも先に口を開いたのはダークマター野田のほうだった。「今登校？」

高くも低くもない中庸的な声音。口や喉があるわけでもないのに一体どこから声を発しているのだろうと会話するたびに思う。けれど、それは人間は何のために生きているのかという問いと同種類物なのだとこの二年間でわかってきたので、俺は普通におはようと返した。

「おう。ダークマター野田も今登校？ 優等生のダークマター野田が遅刻ギリギリなのは珍しいな」

「うん。寝坊しちゃってさ」

「いいよなあダークマター野田は。ワープできたら絶対遅刻しねえよな。いいなあ」

「思ってるほどいいものじゃないよ。着地点を間違えると死んじやうし」

「え、ダークマター野田も死ぬんだ」

「だって僕も人間だよ。人は皆死ぬって」

「ダークマター野田って人間だったんだ」

「アハハ、当たり前だよ」

笑って、ダークマター野田は俺の背中を叩く。でも、叩かれています。感覚はない。なぜかと言えば、ダークマター野田には質量というものが存在しないのである。その証拠に、ダークマター野田はワイプしてきてから今まで、床から十センチほど浮きつづけている。その上、どういう原理なのかわからないが、影も見受けられない。お前って確かに存在してるんだよね？ と問いかけてみたくなるが、問いかけてみたところで先ほどのように「当たり前だよ」と一笑に付されそうなのでやめておく。俺にだって同級生に真顔（ダークマター野田の表情はわからないが）で「当たり前だよ」と返されるのを恥ずかしいと思うだけのプライドはあるのだ。

と、俺たちの脇をバタバタと慌ただしく他の生徒たちが駆けぬけていった。壁にかけられている時計は八時十分を示していた。朝のホームルームまで後五分。そろそろ急がないと遅刻してしまう。

「こんな時間だし、教室行こうか」

「そうするか」

存在からして地球の時間軸に当てはまるのかわからないダークマター野田であるけれど、俺と同様、遅刻はしたくないらしい。まあ優等生だしな。

言葉を交わして、ダークマター野田はくるりと踵を返した。俺もその後続く。

俺とダークマター野田が所属する三年組は、北校舎三階の一番奥に位置する。三学年の各クラスは全て三階に集められているため、必然的に俺たちは全ての教室の前を横切ることになる。

D組の前を通過中、俺はふと思いついたことがあったので、ダークマター野田に話しかけた。

「そう言えばさ」

「うん？」野田は振り返らなかったが、意識をこちらに向けていることはわかった。

「タイタン原田がD組の女子に告られたってよ」

「え、嘘」

「いやマジで」

「誰なの、タイタン原田くんに告白した娘って」

「神岡さん」

「神岡さんって、あのちっちゃい娘？」

「そう」

「で、タイタン原田くんはなんて返事したの？」

「あれ見ればわかんじゃね」

そう言っつて、俺は窓の外のグラウンドを指さした。そこにはこの校舎ほどの大きさの男子生徒が胡坐で座り込んでいる。タイタン原田だ。

タイタン原田の肩には小さな女子が座っていて、二人で楽しそうに何やら話していた。

「後でひやかしにいこう」

「ちよつと性格悪くない？」

「リア充は爆発しろ」

俺とダークマター野田は仲睦まじいタイタン原田神岡カップルを横目に、組へ歩を進める。

少しして、教室に到着。扉を開けて教室に入ろうとしたとき、ダークマター野田の頭上に何かが落下してきた。

「あ」

暗黒物質野田の頭の上でポンと跳ねてから床に落ちたそれは大きさ・色・形から判断するに、どこからどう見ても黒板消しである。

俺は教室の中を覗き、こちらを見やる連中を発見した。タキオン山口を中心とするグループだ。つたく、高校生にもなっつてこんなイタズラするなよな。

「大丈夫か？」床に転がる黒板消しを拾いながら、俺はダークマター野田を見る。「汚れてない？」

「ん、別に何ともない」

「そうか」

黒板消しの当たったはずの頭をしてみるが、チヨークの粉がかかった様子はない。いつもと同じ、吸い込まれそうな漆黒だ。

俺とダークマター野田は教室に入る。ダークマター野田がまったく気にしていないことが面白くないようで、タキオン山口は光速震動していた。それはタキオン山口の苛立ったときの癖だ。

これらのことからわかる通り、そう、タキオン山口の体はタキオンで出来ているのだ。あまり詳しいことはわからなかったが、調べたところによるとどうやらタキオンというものは光速以上の早さで移動する粒子らしい。おいタキオン山口、お前体がそんな粒子で構成されているなら肉眼では捉えられないんじゃないの、とは思いますがこうして実際に見えているのだから俺のあずかり知らぬところで何らかの物理的妥協がなされたのだろう。多分。

「じゃあ、また後で」

ダークマター野田はそう言って自分の席に歩いていった。俺も返事を返し、自分の席に向かう。俺の席は窓際列の後ろから二番目。教師の注目が集まりにくい絶好の場所である。

席について肩にひっかけていた鞆を下ろし、その中から筆記用具や教科書やらを取り出す。そうしていると、ホームルーム開始の電子合成チャイムが鳴り響いた。

それと同時に教室の扉ががらりと音を立てて開かれた。

そこに立っていたのは俺たちのクラスの担任である大賢者市川だ。特徴はいつも変らぬ上下緑ジャージ。大賢者市川はその熊のように大きな体を揺すりながら教室へと入ってくる。

「はい、号令」大賢者市川は教卓の前でこちらに向き直り、そう言った。

「起立」クラスの副委員長である真田真田が声を張る。「気をつけ、礼」

真田真田は一人で二つの席を使用しているが、それは真田真田が二人いるからだ。つまり、真田1+真田1=真田真田なのだ。小学

生でも解ける簡単な計算である。

クラス全員が立ち上がり、そして礼をして再び着席。

この儀式じみた行動から、今日もまた、一日が始まる。

俺は大賢者市川の熊のような野太い声を聞きながら、腕を枕がわりにして夢魔の跋扈する世界へと旅立った。

誰かに呼ばれた気がして顔を上げると、そこにはダークマター野田がいた。

視界の隅に入った時計は午前十時前を指している。あれ。一時間目が始まるのつてたしか八時半ではなかっただろうか？ もしかして俺、朝のホームルームからずっと寝てた？

慌てて体を起こすと、ダークマター野田の両サイドには真田真田が立っていることに気がついた。そして真田真田の左右には知らない男子生徒と女生徒。

なぜか、男女計五人が俺を囲んでいた。

「え、何」俺は状況を把握しきれなくて、戸惑う。「俺、なんかしたっけ？」

「何もしてないけど？ なんで？」

「この状況なら誰だつてそう思うだろ」

そうかなあ、と呟いてダークマター野田は首を傾げる。

「ダークマター野田くん」

「今はそんなことより」

むむむむと沈思していきそうなダークマター野田を左右の真田真田が引き留めると、ダークマター野田は俺の知らない男女に目（？）をやり、何かに気づいたようなりアクションを見せる。

「そうだったそうだった」

「何がそうなんだ？」

「いやあのね、君に転校生を紹介しようと思って」

「転校生？」

そこで俺は見知らぬ男女に目を向ける。

会話の文脈からしてこの二人が転校生なのだろうが、なぜダークマター野田や真田真田が直接俺に転校生を紹介してくるのだろうか？

「そういうのって普通はホームルームとかでやるんじゃない？」

「君がずっと寝てたから、大賢者市川先生が僕と真田真田くんに二人を紹介してやれって言われたんだけど」

「あ、さいですか」

やっぱり俺、ホームルーム中ずっと寝てたのか。ダークマター野田と真田真田には悪いことしたな。

そんなことを考えていると、右真田真田の隣にいた女生徒が俺に手を伸ばしてきた。

「よろしくな。オレは勇者桜井」

「あ、俺は」伸ばされた手を握りかけ、俺は違和感に気がつく。「女なのにオレ？」

「オレはオレ。女とか関係ないから。まあ、ヨロシク！」

そう言っただけで勇者桜井は自分から手を伸ばして俺の手を掴んだ。そして縦にブンブンを振る。

………つて、痛つてえ！ 痛い痛い痛い！

「痛いって！」

「あ、ゴメ」勇者桜井が俺の手を離す。「オレって勇者だからさ、何か聖なる力とかあつて馬鹿力なんだよな」

「へ、へえ」

俺は痛む手を摩りながら、勇者桜井の話に適当に相槌を打つ。

そうしていると、今度は左真田真田の隣にいた男子生徒が手を伸ばしてきた。

俺は一瞬ビクリとするが、その男子生徒は目映い光を放つ歯を見せてニコツと笑い「大丈夫。僕は勇者桜井のように馬鹿力じゃないから」

「あ、そうなんだ」

その言葉で安心し、俺は普通に伸ばされた手を握る。勇者桜井に比べると全然普通の握力だった。

「よろしく」

「よろしく。僕は魔王村岡」

「ちょっと待て！」

声を上げたのは勇者桜井だ。

「初対面の男子に幼馴染を馬鹿力って紹介するとかあり得ないだろ！」

「いや、でも自分でも馬鹿力って言ってたじゃないか」

「自分ではいいんだよ！ オレが言いたいのは、女子を紹介するときはもっと気遣えってコト！」

ぐわーっとなり勇者桜井が文句を並べ立てていく。俺は勇者とかオレとか言ってるけどやっぱり女子って喧しいもんだよなと思って二人を眺める。

「……お前が女子ってガラかよ」

するとそこで、魔王村岡がキレた。プツンという音が聞こえた気がした。

「どこからどう見ても、オレは可憐で可愛い女の子だろうがよ！」
どこがやねんとは思うが、口には出さない。

そこで勇者桜井が右拳で俺の机を叩く。当然の結果として聖なる右拳の一撃に耐えられるはずのない机は砂糖菓子のように崩れた。

しかし、勇者桜井は魔王村岡に向かってまくし立てることに夢中で、俺の机が壊れたことに気づく様子はない。俺はダークマター野田や真田真田を見やるが、やれやれといった感じで肩を竦めて仲裁しようともしない。オイこらお前ら、学級委員じゃねえのかよ。

俺は机の中から零れた教科書や筆記用具を拾って鞆の中にしまい、席を立てて空き教室に新しい机を取りに行く。

教室を出るときにふと振り返ってみると、ダークマター野田が喧嘩する二人の脇で机の残骸を体内へと取りこんでいた。机がずぶずぶと呑み込まれていく光景は何だか見てはいけないものに感じられ、俺は急いで空き教室へと向かう。

がったがったと机を運んで教室に戻ると、ほんの数分間に勇者桜井と魔王村岡の姿は消えてしまっていた。そしてなぜかクラスの皆は窓に釘付けになっている。

机を定位置においてから窓から外を眺めるダークマター野田に声をかける。

「二人どこいったん？」

「あそこ」

「ん？」

俺はダークマター野田が指さす方向に目をやると、そこにはグラウンドの真ん中で睨みあう勇者桜井と魔王村岡の姿があった。しかも着ているのは制服じゃなくて勇者然魔王然としたものだ。勇者桜井には後光が差し、魔王村岡は闇を纏っている。なんだこの陳腐な演出。

「何してんの？」

「決闘だつて」

「決闘？ それこそ何でだよ。たかがあんだけの口論でそこまでするか？」

「まあ、勇者と魔王だからじゃない？」

「わけわかんねよ」

「そうだね」

「止めないのか」

「僕が？」ダークマター野田は心底わけがわからないといった感じで応える。「止められるわけないでしょ」

「でも、クラス委員長だろ」

「そうだけどさあ」

「ずずん。そこで衝撃。校舎が縦揺れした。」

外を見ると、勇者桜井と魔王村岡が巨大な剣で鏢迫り合いをしている。おいおい、鏢迫り合いぐらいで校舎が揺れるんなら、アイツらが本気だしたら地球壊れるんじゃないか？

今は手段を選んでいる場合じゃない。

「お前なら出来るって！」

「いや、でもさあ　って、うわっ」

俺は一瞬の間を見せたダークマター野田の背中を蹴って、グラウ

ンドに投入する。蹴落とされたダークマター野田はしかし、地面に激突はせず、空中でふわふわ浮かんでいる。

「早く行けっ！」

「わかったよもう、乱暴だなあ君は」

そう言うと、ダークマター野田の姿が掻き消えた。次の瞬間には、勇者桜井と魔王村岡のちょうど中間地点に現れる。それに驚いた勇者桜井と魔王村岡はとっさにダークマター野田から距離を取るために飛び退く。とりあえず校舎縦揺れは回避された。ナイスワープ！気が立って我を忘れている勇者桜井は「チイツ！ 邪魔くさいわ！」と言つて、戦術級魔法を多重展開する。幾重にも展開された魔法陣から掃射された目映い光の束がダークマター野田に向かって収束していく。が、それらはダークマター野田に触れる直前、見えないう壁のようなものに阻まれて消失した。

「何だっ！」

「うわ、危ないよ勇者桜井さん。僕がダークマターじゃなかったら死んでたよ？」

やっぱりお前人間じゃなくてダークマターだったんだなと俺は思うが、今はそんなこと全然問題じゃなくて、本当に問題なのはダークマター野田が地球の危機を救えるかどうかだ。

ダークマター野田は右手を勇者桜井にかざし、ひよいを振る。すると、勇者桜井を包んでいた後光や勇者装備やは音もなく消え、あとに残ったのは制服姿の勇者桜井だけ。

「うっ、気持ち悪い」そう言ったのはダークマター野田だ。「勇者桜井さんの装備って宇宙一個分くらいのエネルギー量あるんだね、

……もう少しでキャパオーバーしそっだよ。ああ、気持ち悪い」

「え、あ」

ダークマター野田はくりりと魔王村岡に振り返り、

「魔王村岡くんの装備まで吸収したら破裂して僕らもろとも宇宙が五個くらい消えるかもだから、降参してくれる？」

「えっと、わかったよ」

よし、良くやったダークマター野田！
それでこそ委員長だ！

職員室。

大賢者市川を目の前に、勇者桜井と魔王村岡とダークマター野田が立っている。

先程の決闘騒ぎがバレて、「勇者桜井と魔王村岡の二人は職員室まで来るように。あと、委員長のダークマター野田も来なさい」という校内放送で呼び出されたのだ。

ダークマター野田は決闘の経緯を大賢者野田に話し、勇者桜井と魔王村岡の両名は互いにぶつくさ言い合いながら横に控えている。で、さらにその横に俺。え、何で俺までいんの？ 意味分かんない。

「僕に決闘を止めるように言ったのは君でしょ。なら、一緒に来てよ」

と、訳のわからぬままワープさせられた。ぐわんぐわんと視界が歪んで、うえ、吐きそうと思った次の瞬間には、俺とダークマター野田は職員室に到着していた。

最初は、うわすげー、俺ワープしちゃったよ！ とか喜んでいてけど、その直後にワープに失敗したら死んじゃうというダークマター野田の言葉を思い出し、

「おまつ、急にワープするなよ！ 死んじゃうだろ！」

と、若干本気でキレてしまった。

「何でいきなりキレてるの？」

と、真顔(?)で返されたが、明らかにダークマター野田の配慮不足だろうと思うので、まあ、しばらくは許さん。

そうして俺は若干キレ気味で勇者桜井と魔王村岡の横に立っている。

「お前はいつも俺のこと悪く言うよな」とか「それは、他人にお前のことよく言っちゃったら、誰かお前のこと好きに……」とか「

え、今何ていったんだよ？」とか「何でもないよ！」とかいう会話が聞こえてくる。なんかこの二人、ただの仲がいい幼馴染にしか思えない。今は喧嘩しているがどうせこの後仲直りして、くっついちゃうんだろう。どうぞお幸せに！　ちっ、マジ、リア充爆発しろ！　いや、勇者と魔王だからそう簡単には死なないと思うけど。あーあ、ダークマター野田に頼んだら、どうにかなんないかな。

と、そのとき、俺の名が呼ばれた。

鬱屈した精神の底から舞い戻り、顔をあげると、大賢者市川がこっちを見ていた。

「え、何ですか？」

「いや、それはこっちが訊きたいんだが」

「はい？」

「何でお前まで来てるんだ？」

「え、いや、俺もわかんないんですけど。何かダークマター野田に連れてこられて」

「そうなのか？」

大賢者市川が隣に立つダークマター野田を見る。

すると、ダークマター野田は飄々と、

「彼が放課後に二人に学校の中を案内したいって言ったので」という嘘っぱちを言ったのけやがった。

は！？　何言ってるの！　おい、ダークマター野田この野郎！

「おお、そうかそうか」

「え！　違、」

「ん？　違うのか？」

俺が慌てて違つと訂正しようとする、横から視線を感じる。

見ると、勇者桜井のキラキラと期待に満ちた「お前っていい奴だな」という眼差しが、そこに。

うっ、これじゃあ、断れないじゃないか。そんな煌めく聖眼攻撃に対する耐性とか、俺のスキルに入っていない。

さらに、勇者桜井の横の魔王村岡からは「転校してきた僕たちの

案内を進んでやってくれるなんて、彼とほいい友達になれそうだ」という波動が飛んでくる。

二人の視線を受け、俺の頭はもうパンク寸前だ。脳内処理が追いつかん。

「学校、案内してくれんのか？」と勇者桜井。

「う……」

「本当に、いいんですか？ もし僕や勇者桜井に遠慮しているんだつたら……」と魔王村岡。

「う……」

「してあげたいって言ってよね」とダークマター野田。

「う……」

ぼんっ。

「ぜ、ぜひ案内させていただきます……」

「そうか。なら、頼んだぞ」

「はい……」

そのときの俺の声の大きさは、限りなくゼロに近かったと思う。

ダークマター野田を見ると、真っ黒な顔に「さっき僕を蹴り落とした罰だよ」と白文字で書かれていた。

それどうやってるんだよという疑問が浮かぶが、今の俺にはツッコむ気力もない。ヘビーローテーションだ。

「よし、じゃあ、もう教室に戻っていいぞ。次から決闘するときには事前に申請するように」

「はい」

「わかりました」

勇者桜井と魔王村岡が返事をする。

ヤバイ。何がヤバイって今の賢者市川の発言には明らかにおかしいところがあったのに、俺はそれにツッコむこともなく、平然と受け流してしまったことがヤバイ。受け流してしまったことを自覚しているのに、それでもツッコもうとしないのがさらにヤバイ。

どんだけやる気無いんだ、今の俺。

ぼち。

ぼち？ ぼちって何だ？ 何か押された感じがする。

「これでよし、と。しばらくしたら再起動するから」

再起動って、何のことだ……？

お、お、お。体が動かん。どうした俺のボディ。なんかヤバい気がする。新手の病気か何かか？

あれ、れ？ 何だか目の前が暗くなって来た。

あ……………。

ピー、シャットダウンします。保存されていないデータは削除される可能性があります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8797x/>

非実在青少年学級

2011年11月29日02時51分発行